

『副作用』

4月9日の新聞各紙に、「消費者庁が市販薬による副作用に注意喚起」という記事が掲載されました。ご覧になられた方も多いと思います。記事では、市販薬による副作用が疑われる症例が2009年4月から昨年3月の5年間で1225件、死亡例が15件、後遺症が生じた例が15件だったと報告されています。消費者庁は、「初期症状のうちに治療すれば重症化は防げる」と強調しており、副作用と疑われる場合は服用を中止し、医師の診察を受けることを勧めています。

今回は、病院で処方される医薬品でも危惧される「副作用」について簡単に説明します。

【副作用とは】

少し前までは、治療の目的に利用する薬の働き（主作用）以外のものを「副作用」と呼んでいました。人間が昔から利用してきた細菌による分解反応と似ていて、基本的には同じ分解反応なのですが、人間のためになるか否かで呼び名（評価）が分かります。

発酵 = 有益 = 主作用

腐敗 = 無益 = 副作用

しかし最近では、医薬品を使用したことにより生じた好ましくない反応すべてを含むようになっています。飲んだ人の多くに生じるもの（花粉症の薬による眠気など）から、何万人に一人にしか生じないものもあります。

一つの定義を載せておきます。

出典：フリー百科事典『ウィキペディア』

「医薬品の使用に伴って生じた治療目的に沿わない作用全般を指す。狭義には、医薬品の使用に伴って発現した好ましくないできごとのうち当該医薬品との因果関係が否定できないものを指す。この好ましくない作用を厳密に指す場合には、**薬物有害反応**の用語が用いられる。一般に副作用といった場合には、両者が混合して用いられる。」

【副作用の症状】

副作用の症状としては、発疹・下痢などの軽度のものから、ぜんそく発作、皮膚疾患、肝機能障害、間質性肺炎などの重篤なものもあり、重大な健康被害を生じる場合もあります。また、急激なショック症状（血圧低下、呼吸困難など）により死に至る場合もあります。

ショック症状などの急激な症状は、薬を使い始めて早い時期に発現するケースが多いですが、症状が現れるのに時間がかかる場合もあり、「体がだるい」「咳が続く」といった症状が現れた時には、すでに障害が重篤化している場合もあります。長期間の使用により、回復が困難となる場合もありますので、注意が必要です。



【副作用の原因】

副作用が生じる原因は数多くあります。代表的な原因をあげておきます。

目的とする薬の働きが予想を超えて生じる

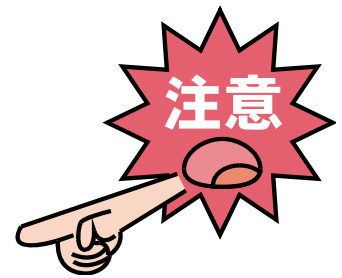
治療のため期待される薬の働きが、予想を超えて作用してしまうことがあります。「気分を落ち着かせる薬が強い眠気を催し、日常生活に支障を来す」「比較的效果が緩和な薬なのに、血圧が異常に下がってしまった」などの例があります。その日の体調なども影響しますが、薬を飲み始めて早い時期に現れることが多いです。

薬の併用による影響

薬の併用（追加）により、思わぬ影響が出る場合もあります。「似たような働きのある薬を追加したことにより、急激にその効果が増強する。」「いつも飲んでる薬の血液中濃度が高くなり、薬の効果が出過ぎる。」「薬の分解が遅くなり、薬の効果が長く続いてしまう。」など、薬と薬の作用により、大きな影響を及ぼしてしまう場合があるので注意が必要です。使用する目的や働きが全く異なる薬同士でも起こりますし、貼り薬・目薬などの外用剤でも起こる可能性があります。

アレルギー体質

薬の成分や添加剤に対するアレルギーにより副作用が生じる場合もあります。食品に対するアレルギーと同様で、原因となるものは無数にあります。代表的な薬としては、抗生剤、鎮痛剤などがありますが、比較的副作用が少ないと言われている漢方薬などでも起こります。また、アレルギー体質の方は、似た種類の薬で症状が現われることがありますので、以前に薬を飲んで症状が出たことがある方は、診察時や市販薬の購入時に必ず申し出て下さい。



【副作用への対策】

薬の副作用を完全に予防することは困難です。「薬を使用し始めてからいつもと違う」と感じたり、発疹・目の充血・むくみなどの症状が現れた場合は、使用を中止して早めに医師の診察を受けて下さい。また、前にも述べましたが、以前に副作用が出た経験がある方は、病院で診察を受ける時や、薬局で市販薬を購入する際には必ず申し出て下さい。



早期発見・早期治療が重要です！